★51★

肥えた牛で年貢上納

渡辺　大直

夏休み特別企画として、三田市にある〝県立人と自然の博物館〟で出張展示した。但馬牛や神戸ビーフに関する展示はもちろんだが、牧場公園周辺に住む昆虫や植物、化石も展示して、豊かな自然も併せて発信しようとする試みだ。牛や牛肉のことはともかく、虫や植物、化石となると全くお手上げなので、〝人と自然の博物館〟の研究員や新温泉町の〝おもしろ昆虫化石館〟にも協力していただいた。

この期間中に、但馬牛を食べながら但馬牛、神戸ビーフの話を聞くセミナーを企画し、三田に出かけた。

道中、思い付いて寄り道をした。そこは三田市内の閑静な住宅街にある細い坂道だ。この坂は〝牛くそ坂〟という。なんともダイレクトなネーミングのせいだろうか、以前来たときは「通称・牛くそ坂」と書いた案内プレートがあったが、無くなっていた。

江戸時代、この坂の突き当たり付近に三田藩の大蔵があり、年貢の米俵を背にした牛が列をなし、その名の由来となる事態が生じたとされる。さほど長くない、細い坂道だが、こんな呼び名が付いたのは、年貢を運ぶ牛が一時に集中したということだろう。

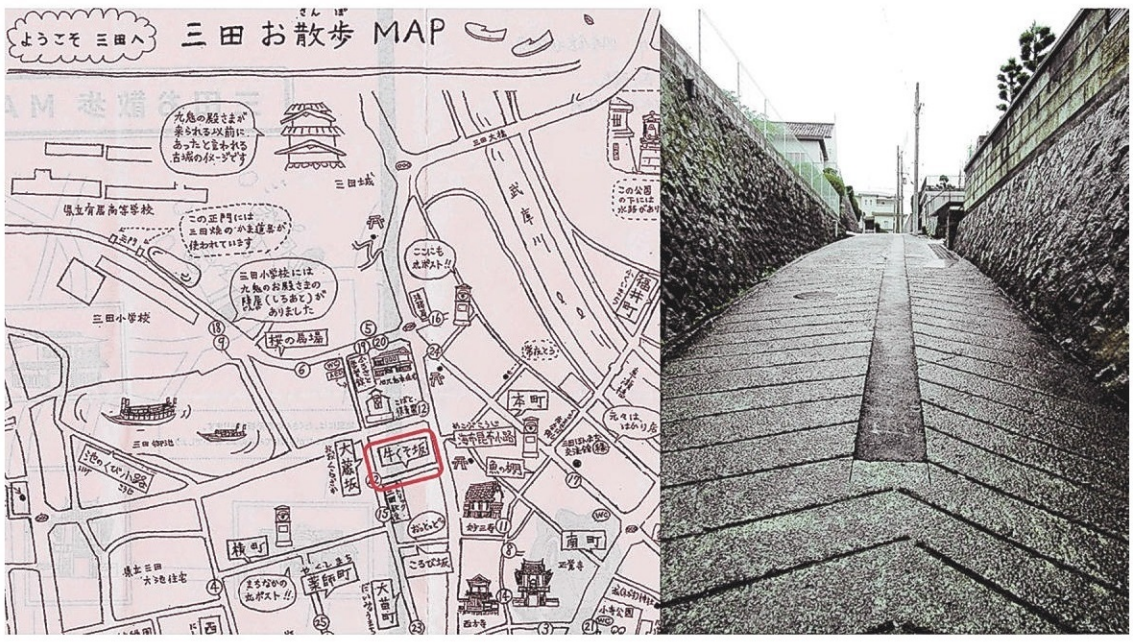
有馬郡辺りの諸藩は、牛が肥えているか痩せているかで農民の勤惰を測り、『貢米上納にあたり肥満せる良牛を牽くる者に賞米一斗を与えし』と伝えられる。ひょっとすると、三田藩は肥えた牛を選ぶために、日を決めて年貢を納めさせたので〝牛くそ坂〟現象が起こったのかもしれない。

また、太った牛を良とする藩の方針によって、牛に麦を食わせて太らせる〝飼い肥やし〟という飼い方が農民に広がったという。

三田藩をはじめ、有馬郡辺りは、養父神社の牛市から大阪に向かう、江戸時代の但馬牛主要流通ルート上にある。大阪博労は但馬で買い求めた牛をこの辺りの農家に預けて育てさせ、牛が一人前になると新しい牛と交換するシステムがあったそうだ。

幕末に横浜が開港し、外国人がやって来る。しかし関東に牛は少なく、外国人の食用にする牛の確保がままならなかった。そのため、有馬郡周辺の牛を集め、神戸港から横浜に回漕した。そしてこの肉を食した外国人がたいそう美味であることに感激し、〝KOBE BEEF〟と称賛したのが神戸ビーフの始まりと伝えられる。

こう並べてみると、〝牛くそ坂〟は但馬牛と神戸ビーフをつなぐ接点のように思えてくる。これをツカミネタにしてセミナーで但馬牛の話をした。気が付くと但馬牛は完売御礼で、指をくわえるしかなかった。



「牛くそ坂」の表記がある三田お散歩マップと実際の坂

■筆者プロフィル■
わたなべ・ひろなお
1954年、新温泉町浜坂出身。県職員として畜産行政に長年携わってきた。県立但馬牧場公園「但馬牛博物館」館長。

(C) 新日本海新聞社　無断複製・転載を禁じます